

「関心による集団（COI）」のコラボレーションにおける障害

4 Y-7

溝渕 佐知

日本電信電話株式会社 NTT ソフトウェア研究所

1 はじめに

1.1 COIとは

電子メディアが我々のコミュニケーションに与えるインパクトとしては、時間的・空間的自由度の増大が挙げられる。すなわち、従来の集団が、地理的近接や年齢・職業といった属性の類似によって広がり範囲を制限されたのに対し、電子メディアは、関心を同じくするものが時間的、空間的な距離を越えて結びつくことを可能にするといえる。本研究では、以下、このようなタイプの集まりを「Community Of Interest: COI」と呼ぶ。

1.2 COIの現状と可能性

現在、メンバーの関心に基づいて形成される、電子メディアを介した集団には、メーリングリストや、商用ネットワークの「フォーラム」「SIG」などのユーザグループがある。これまでにネットワーク上にこのようなCOIが多数形成されてきているが、多くは「共通の関心領域の情報交換の場」として機能するに留まり、その集団として何らかの具体的成果物を出そうとする動きは稀である。

しかし、多様なメンバが自発的に集まって形成されるCOIという場合は、既成の枠に囚われず新しいものを生み出していくことのできる可能性を有しているといえる。

本稿では、協調的創造活動の場としてのCOIの在り方を提案した上で、その実現の障害となる要因について指摘・分析を行う。

2 創造的COI

COIは、外的制約に縛られず豊富な人的リソースが利用可能であること、また、関心領域に基づき各人の意思によって参加が決定されるという発生上の特徴から、その領域における深い知識と内発的動機を持つメンバーによる活動が期待できるという利点を持つ。このようなメンバによってコラボレーションがうまく行われれば、大きな力を発揮すると考えられる。

個人の側から見ても、COIは、場所、時間、内容について自由度の高い活動を提供する場であるといえ、創造活動の新しい在り方を提示するものとして期待できる。

そこで、本研究では、創造活動の場としてのCOIの理想的機能モデルとして、図1を提案する。このモデルでは、人は関心に基づく各自の意識的選択によって「出会い」、メンバ間の協力によって何かを「生み出し」、それを集団外あるいは次の世代のメンバーに「伝える」。さらに、このような活動のサイクルが実現するためには、ある程度の期間集団が持続しなければならず、COIはこのための「維持」メカニズムを必要とする。

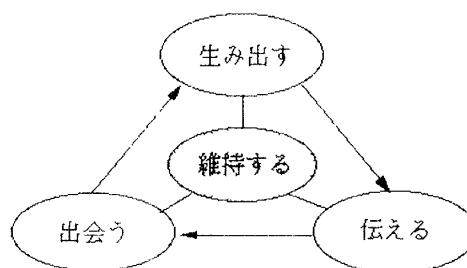


図1：創造的COIの機能モデル

3 集団のタイプとCOI

ある集団を維持するには、その集団をまとめる力が必要である。集団内にメンバを自発的に留まらせるように作用する力の総体を集団の凝集性と呼ぶ[1]。本研究では、図2のように、凝集性が「共有された課題の達成」などの、集団の外からも明確に観察可能なものと、メンバー同士の好意などの直接には観察できない、活動に内在したものとどちらにも多く依存しているかによって、グループの様態を捉えることにする。ここでは、外的凝集性の比重が高い集団の典型例として「タスクフォース型チーム」、内的凝集性の比重が高い集団の典型例として気の合う仲間同士の「仲良しサークル」を考える。

COIは、この軸の中心周辺に位置すると考えられ、集団のライフサイクルのフェーズに応じて、この位置は変動すると考えられる。すなわち、図1における「出会う」フェーズでは、内的凝集性が相対的に強く、「生み出す」フェーズでは外的凝集性が相対的に強くなると考えられる。

Some difficulties in collaboration of a Community Of Interest (COI)

Sachi Mizobuchi (buchiko@slab.ntt.co.jp)

NTT Software Laboratories

3-9-11-9-511A Midori-Cho, Musashino-Shi, Tokyo, 180, Japan

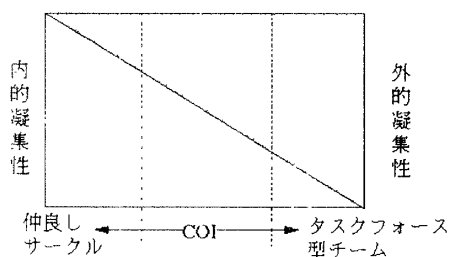


図2：集団のタイプ

4 COIにおける活動維持の難しさ

図1のコミュニティの機能のうち、COI特有の困難さを抱えているのが「維持」の部分であるといえる。

COIは、タスクフォース型チームのように、集団である必然性が組織構造などによって規定されない。したがって、仲良しサークルのようにメンバー同士の好意に依存し、気が合わなくなれば分裂する、と割り切るのではないとすれば、自律的な維持メカニズムが必要となる。

しかし現状、COIにおいては、「特定の領域に関心を持つ」という類似性によって集団が形成されるが、コミュニケーションを行っていく過程でそれぞれの目的、集団として達成したいと考えていることが異なっていることが明らかになると、集団としての凝集性が弱くなっていく。存続し続けるためには凝集性を保つ、もしくは強化する必要があるが、

- ・ 様々な背景を持つメンバが集まる
- ・ メンバ間の関係が階層構造ではなく水平構造
- ・ メンバ間に物理的・社会的距離（所属組織が異なるなど）がある

という、まさにCOIの発生契機上本質的な特徴ともいえる要因が、以下のように凝集性を弱める方向に働くと、集団の維持は困難になる。

4.1 共通の地盤が築きにくい

様々な文脈を有するメンバが水平的な関係を保つことが前提とされることが多いため、具体的な「共通認識」を設定することが難しい。

4.2 話が噛み合わない

異なった文脈を持つ複数の人がコミュニケーションを行おうとする場合、まず互いがどのような文脈にあるのかを見極める必要がある。コミュニケーションとは、文脈間の差異を特定し、相互作用を通じて共通の文脈を作り出す過程にはかならない。COIの場合、背景の様々な人々が集まりやすい上、問題設定が緩やかなために、メンバ各自が自分の想定した文脈で対話を行おうとするため、言葉の定義が違ったり、そもそも「何について話

しているのか」がずれているなど、会話が噛み合わない事態が生じやすい。

4.3 活動に連続性が感じられない

明確な目標やスケジュールが共有されにくいいため、集団がどこに向かっているのか、自分が今行っていることが将来の活動にどのように連続していくのかが見えにくく、達成動機が生じにくい。

4.4 活動に十分に関与しているという感覚が得られない

上からの指示によって動くのではなく、自発的に動くことが前提となるが、何をどこまですれば他のメンバから「十全に参加している」と認められるかについての規範が無いため、自分が活動全体のどの程度負っているのかが見えない。

4.5 「副業」という意識が生じやすい

オンラインでの活動は、自分の時間、労力を最大に費やすべき「本業」ではなく、余剰の部分を使って行う「副業」として捉えられやすい。この背後には、仕事は特定の時間、空間を共有して行われるというパラダイムが支配的であるという現状と、オンラインの活動への参加の気軽さがあると考えられる。

本業ではないという意識は、責任回避のための口実として利用されやすく、活動に対する各人の責任範囲が曖昧になる。このことは、活動に対する各人のコミットメントをさらに薄いものにするという悪循環を生み出すもととなる。

4.6 異なる参加形態の間にギャップが生じやすい

電子メディアを用いて様々な環境の人々が集まることによって、メディアを介さないでオフラインで行われるコミュニケーションの場に参加できないメンバーとできないメンバーが生ずるが、オフラインの会合に参加したメンバとしなかったメンバとで、その後共有される話題が異なり、そこから意識のずれが生じることがある。

5 おわりに

本稿ではCOIが創造活動の場となるための理想的機能モデルを提案し、そのために障害となる要因を分析した。

COIは我々の創造活動の新しい在り方として期待されるもので、電子通信技術がこのような集団活動をいかに支援しうるかを考えることは有益であると考えられる。

6 参考文献

- [1] 岩下豊彦 1985 社会心理学 川島書店